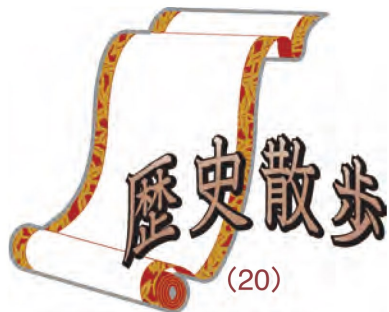




石山観音

県道津関線沿いの楠原地区から南西の山中に入ったところに、石山観音と呼ばれる仏像を40体ほど岩壁



に刻み込んだ丘陵がある。このような仏像を磨崖仏^{まがひ}といい、このうち、3体が三重県指定の文化財になっていて、今回はそれを紹介しよう。

まず、磨崖阿弥陀如来立像は、石山観音磨崖仏群の中で最も大きく、高さ3メートル52センチ、台座を含めると5メートルにもなる。仏体を雨露から保護するため、光背を深く彫り込んでいて、台座の紋様から鎌倉時代末期の作と考えられている。

石山観音入口の西正面にある巨石に彫り込まれている磨崖地藏菩薩立像は、高さ3メートル24センチ。右手に錫杖、左手に摩尼宝珠を持った十頭身に近い容姿をしていて、錫杖の形から室町時代初期の作と考えられている。

そして入口から少し登った岩壁に彫られているのは、磨崖聖観音立像。高さは2メートル52センチで、江戸時代、嘉永元(1848)年に浄蓮寺の僧覚順が、奈良の唐招提寺の聖観

音を模写して彫ったもので、この磨崖仏群の中で、唯一造営年代が分かる像である。

石山の山頂に登ると、長く滑らかな岩があり、ちょうど馬が頭をたれて草を食べているようにみえることから、「馬の背」と呼ばれている。ここからの眺望は格別で、しだいに紅葉に染まっていくこの季節、一日散策してみてはいかがだろうか。

(「広報津」平成19年10月1日号)



磨崖阿弥陀如来立像